九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

EthnicityとClass : Ethnicityに関する都市人類学的考察

江淵, 一公
福岡教育大学

https://doi.org/10.15017/2231578

出版情報：九州人類学会報. 4, pp.39-48, 1976-12-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

Ethnicity と Class

― Ethnicityに関する都市人類学的考察 ―

福岡教育大学　江淵一公

1

今日、アメリカの都市社会におけるethnicityの研究の焦点は、都市における生活を支配している二つの組織原理であるethnicityとclassとの間の緊張関係、あるいは調和関係をめぐる問題にある。一方の組織原理＜ethnicity＞は、都市という社会体系の中で果たしている役割のいかんにかかわらず、自他共に“同種”と見做すところの、文化的、歴史的、地理的な人間の集合体をつくりあげる基盤としてのethnicityである。他方の組織原理＜class＞は、都市という社会体系をその役割および資源の配分に関して格差をもつ、いくつかの機能的な集合に分化させる原理である。

このethnicityとclassの関係をきわめて象徴的に表明する言い方として、今日、よく耳にするものに、次のような二つのタイプがある。その一つは「あの黒人は、立派な弁護士だというが、黒人は黒人だ。」とか、「彼は市長だが、インディアンはインディアンだ。」という言い方である。これはいかなる職業（都市的機能分化）に就いていても、“ethnicity”は不変のままであることを象徴するものである。一方、これと反対に「あの市長は黒人だが、しかし“市長”であることにちがいはない」「あの掃除夫は“オレは白人だ”と威張っているが、“掃除夫”はやはり“掃除夫”だ」という言い方もある。

前者は、都市社会における“機能分化”の発展にもかかわらず、依然として、不変のままに止どまる“ethnicity”の性質を物語っており、反対に後者は“ethnicity”のいかんにかかわらず、都市的生活構造文脈においては、“機能分化”の体系における個人の役割が大切であるということを強調している。

別言すれば、一方では都市的機能分化にもかかわらずethnicityが持続するという面があり、他方では都市的機能分化がethnicityを稀薄化させようとする面があることを示唆している。このethnicityと、都市的機能分化の原理であるclassとは、どのような社会的条件の下では共存し合い、あるいはまた、どんな社会的条件の下では葛藤し合うのであろうか。それらの条件をさぐることが今日の都市人類学の課題となっているのであるが、ここではとくに、都市的生活構造〔各種の利益、資源への接近の機会のしくみ〕のちがいがethnic identity および ethnic group 内の社会関係に対して、どんな影響を及ぼすのか、という問題を取りあげてみたい。この問題はアメリカのみならず、民族的に複合化、多元化の進行が見られる世界中の諸都市に共通の今日的課題なのであるが、ここではアメリカの文脈で、それもとくに黒人の場合に焦点づけて検討してみたいと思う。

2

具体的な問題に入る前に、若干の理論的な整理をしておく必要がありそうである。まず、ethnic groupというものをどう捉えるか、仮説的にでも検討しておく必要がある。

一般に“ethnic group”とは、「言語その他の歴史的文化的背景を共有するところの社会組織の一形態（F．Barth）」であり、事実上もしくは信仰上、祖先を共有する広い意味で一種の“出自集団”であると言える。それが今日、世界各地で“民族の抬頭”が言われているのは、そうしたethnic groupが再組織化されつつある現状を指しているが、なぜそういうものが最近になって現われているのか。その秘密は、現代の都市社会の生活構造の本質としての「競争」原理と関係があり、ある種の利益、資源を求めて集団が競争的関係に巻き込まれる、という文脈ないし構造がそこにはあるからではないかと考えられるのである。

出発点として、Abner Cohenの提起した「利益集団説」を取りあげたい（これについて若干は、本会報創刊号でも触れたことがある）。Cohenは、西アフリカのナイジェリアのヨルーバのハウサ族の研究から、それを導いているが、このモデルは都市におけるethnic groupの組織化の研究に対する比較研究の枠組として有効であると思われるからである。

ハウサ族のコミュニティは、ハウサ族の首長の統治下にあって、一つの政治的、宗教的単位を形成していると同時に、他方においては、その住民の多くがずっと広い範囲にひろがった牛の交易およびコーラの交易に参加している。その手広い交易圏を一手に支配しているハウサ族は、そこに他の者が侵入してくるのを警戒して、一つの協同組合の如きものをつくっている。その協同組合の維持の原理が、高度のethnic solidarityなのだ。ハウサ族のcommunityの内部はどうかというと、内部関係は複雑多岐で、宗教、政治、居住地区、その他の要因によって分化していて、必ずしも全員が“一丸”となって結束しているわけではなく、アイデンティティは拡散的である。しかし、部外者（ハウサ族外）に対する関係に関する限り、つよい連帯の結びが存在する。

さて、あえてCohenの説を要約して示すとすれば、次の2点になる。

(1) 都市のethnic groupは、公開の領域における諸種の資源を求めて、他の集団との競争、斗争に従事する利益集団である。

(2) この斗争に対して、ethnicityは「連帯」を促進するための慣習的よりどころとなる。

さらに、Cohenは,ethnic groupは他のethic groupとの間に競合的関係に立つところにこそ、ethnicityの本質があると考えている。その競合の中で、成員はしだいにそのアイデンティティと排他性を発達させるわけである。

人類学の古典的定義に沿って、ethnicityを検討しているF．Barthは、ethnic groupの本質をもっと一般的に定義しようとしているが、しかし現代のethnic groupを考える場合は、Cohenの定義の方がぴったりするようである。

ところで、この“利益集団”説がもっともよくあてはまるのは、ハウサ族の人々の圧倒的多数が牛、

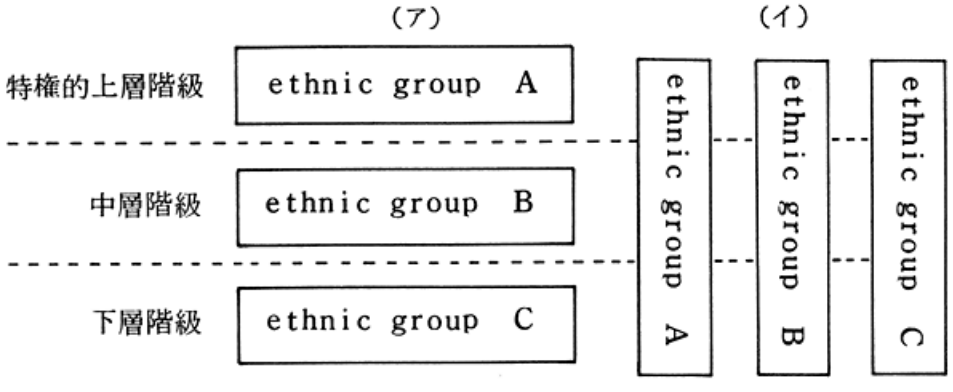
コーラ交易という一つの社会経済的な位置（niche）に集中しているために、「ハウサ族」＝「牛、コーラ交易集団」という重複関係がある、ということが基盤になっている。しかし、都市におけるethnic groupは果たして、つねに利益集団になると言えるであろうか。そうならない場合というのはないのだろうか。

ここでもう一度、はじめに述べた都市社会の生活構造における二つの組織原理の区別の問題に立ち戻ってみる必要がある。その一つはethnicity〔ethnic group〕であり、他の一つはClass〔職業集団など〕である。

まずethnic groupは、都市の生活における資源配分の機会の構造の中で、その内在的性質によって特定の位置を占めるというようなことはない。つまり、どのような位置にくるかははじめからきまっているわけではない。だからこそethnic groupはより有利な位置を手に入れ、それに対する統制力を確保しようと試みるようになるわけである。

もう一つの種類の集団〔階層的、職業的集団〕の場合は、はじめから特定の位置にある人から構成されており、自分たちの集団に最大限の資源の配分を確保することに関心を抱いている。それゆえ、この種の利益の追求をめぐって、他の集団と競合する関係になる。この場合、集団内の個人差は無関係だと見做される。この種の集団の典型的な例は労働組合である。

これら両者の関係について、一般論としてはethnic group と social classが合致するような社会状況（ア）と、ethnic group と social classとが一致せず、各ethnic group が階層分化の線に沿って、タテに拡がっている場合（イ）とを区別することができよう（下図参照）。



図において（ア）の場合には、ethnic groupは、まぎれもなく利益集団になる。その場合には、集団間の連帯、結束が他の集団との競合において有益である限り、ethnicityに関する諸慣習が活用される。各ethnic groupは、既得権の保護のために、あるいは不利益な立場から脱却して有利な立場を獲得するために、“同類”意識をかき立てようと、民族史的（系譜的）紐帯や血のつながり、共有する生活慣習の特質などをそこに打ち立てようとする。

反対に、ethnic groupがいくつもの階層にわたっている場合（イ）にはどうか。Cohenは、そういう場合にはidentityと排他性の表明はむしろ陰蔽される――少なくとも上位の権力層はそうしよう

と試みる、そしてethnic group Aの中の非特権階級は別のethnic groupの中の同じ立場におかれている階級と提携協力して、自分と同じethnic groupの支配者層に対して反抗を試みるようになるという仮説を立てている。

しかし果たして、そういくのだろうか。かれのいわんとするところは、後者の場合——つまり、同一ethnic group内に階層分化がある場合——には、"Class"の原理が前面に出て来て"階級闘争"の様相を帯びてくる、ということなのであるが、階級間の葛藤の抬頭と、それに応じた形での民族集団間の葛藤の自然消滅とが自動的に起こると言えるかどうか。必ずしもそうは断言できないのではないか。今日のアフリカ諸国において観察されることは、ethnic groupを超えた階級的連帯ではなく、各ethnic groupごとに、エリートと大衆とが、いわゆるpatron − clientの関係で相互関係を保っている姿である。パワー・エリートたちは、自分のethnic groupの下層民に、仕事やその他の便宜を計ってやろうとする場合がある。そのような場合には、ethnicityが階層的社会体系における垂直的な統合単位として、機能すると考えられる。それは同じethnicityで違った位置にある人々が、相互補完的に奉仕し合う関係である。すなわち、資源の不足と民族的自覚とが結合するとき、民族集団間の敵対関係が出現し、交換原理に基づく形で、ethnic group内の垂直的統合が強化されると考えられるのである。

3

さて、アフリカの状況と比べた場合、アメリカの特徴と言えるものは、アフリカの都市におけるethnic groupが、たがいにほぼ対等な立場にある（歴史が浅いこともあって）のに対して、アメリカの場合は、あるethnic group〔アングロ・サクソン系〕が他のethnic groupに対して"優位"にある、といった支配的集団対従属的集団の関係を往々にして示すことである。もともと植民地化の開始のころから、アングロ・サクソン系が他の移民集団をうけ入れる立場にあった。アングロ・サクソン系プロテスタント（WASP）を中心に、他の北西ヨーロッパからの移民集団（ドイツなど）が、いっしょになって巨大なプロテスタント勢力を形成するに至った。その後の移民集団は、そのためこれらWASPの影響を相当つよくうけることになったのである。現在、ニューヨーク市など大都市ではWASPは数の上では"minority"であるけれども、ナショナル・レベルにおけるかれらの経済的、政治的支配力は群を抜いている。それゆえ他のethnic groupに対して、依然少なからぬ影響を及ぼし続けている。

面白いのは、これらWASPはふつう自分たちのことを"ethnic group"とは全く考えないことである。政府の議会の書類などでも、"ethnic"というときは、新しい白人移民やその他のいわゆる"minority"をさしており、WASPこそは"真のアメリカ人"であり、われわれは"non − ethnic"なのだといった含意がそこにはうかがわれる。

それらの"ethnic"の中には、アイルランド系、東欧・南欧系、プエルトリコ系、東洋系、メキシ

コ系（チカノ）、アフリカ系（黒人）、アメリカインディアンなどが入るが、このうち、チカノ、プエルトリコ、黒人、インディアンなどは、とくに“ethnic minority”として、他の“ethnic”とは区別されることもある。

このWASP－ethnic －〔minority〕というわけ方は、それじたいWASP中心主義的見方なのであるが、一応便宜上、この慣習に従って見る。というのも、現に“ethnic”としてのイタリア系、ユダヤ系、黒人などの社会経済的地位は、WASPとの関係によって著るしく左右されるからである。

19世紀後半にアメリカにやってきたこれら“ethnic”の新移民群は、産業化の進展に呼応したものであったから、当初一様に貧しい未熟練労働者であった。それゆえ、「アメリカの下層労働者階層の暮し方」という場合は、「新移民」＝「ethnic」と同義語のイメージをつくり出したわけである。新移民たちが貧しかったために、初期の移民たちは相対的に高い階層に押し上げられた形になった。そして前からいたWASP系労働者たちは、新しいethnic系労働者たちが低賃金で働くために、自分たちがせっかくつくりあげた賃金体系をこわし、またストなどのときにはスト破りの役割を果たすのではないかと、たいへん警戒した。このように、同じ「労働者階級」の内部で、すでに当初こうしたethnicityの差異が“階級内矛盾”として存在したことが注目されるのである。支配階級たちもまた、新移民を労働者“階級”であると同時に“ethnicity”である、と見なしがちであった。

このように、新しい移民たちは都市社会体系の中で下層におかれ、しかも、古い移民層はその民族集団の扉を固くとざして、自分たちをうけ入れようとしない情況を見出さざるをえなかったわけである。そのことから、かえってかれらはもし何か有利な立場を求めようとする限り、自分のethnicityを意識せざるをえなかった。言うなれば、WASPの固さがこれらの新移民群に、それに対する反動として自らの民族意識を高めさせる結果となり、利益集団化を導いたと見ることができよう。

こうした状況の中で、ethnic groupがとった生き方の一つは、まさにハウサ族の場合と同じく、社会のある機能（産業上の位置）を各自のethnic groupの独占とし、支配権をにぎることであった。しかし、これらとても、他の職業をWASPが支配していたからやむをえずそうなったのである。かれらが少しずつ富を蓄積してくると、もっとましな仕事＝階層的位置を求めるようになる。ところがそれらはWASPの統制の下にあるので衝突するおそれがある。そこで、かれらが考えたのはアメリカ社会が必要とし、WASPがまだ十分開拓していない領域を発展させることだった。こうして、たとえば、ユダヤ人は織物産業や映画産業の分野に進出して繁栄をもたらし、ニューヨークではイタリア人は貨物輸送産業に進出して実益をあげた。もっとも、こうした発展の中でethnicityそのものの果たした役割がどれほどのものだったかは、正確にははかりがたい。

もう一つ、ethnic minorityに開かれていた新分野があった――それは組織“犯罪”である。イタリア系アメリカ人の犯罪組織（マフィア）は有名である。

また、新しい移民たちのWASP支配の社会体制への適応の別のパタンは、同じethnic groupのメンバーに対して、その企業のサービスを有利に提供し、同じ顧客でも他のethnic groupのメンバ

ーとは区別するという形で、自分のethnic groupの利益を保護することであった。

支配集団によって、階層体系の最低辺におかれたethnic groupが、少数ではあるが支配集団に依存することなしに、自分の力でコミュニティの中にそれを基盤にして事業を樹立する場合がそれである。これは、とくに黒人コミュニティに見られ、一つの自給的、自律的共同体をつくっている場合が多い。たとえば黒人専用の銀行、保険会社さえあるところもある。しかし一般には不動産業、葬儀社、理容店、医者、食料品店など零細企業が多い。

しかし、それにもかかわらず、黒人コミュニティの場合、黒人所有の企業の隆盛をはかることは容易ではなかった。その理由は、たとえばイタリア系やユダヤ系の場合には、その食生活習慣というはっきりした文化のおかげで、民族系食料品店が企業として独自性を保ちえた（つまり、他の一般の食料品店では買えない“ethnic food”を売った）。しかし黒人の場合は、最近でこそ“soul food”などがもてはやされてはいるものの、それ専用の店など成り立ちにくい。材料はどこででも買える代物ばかりだからである。

この意味では、ethnic groupに求心的志向をもつ企業なるものも、その集団がどれほどの“ethnic”独自の技術能力<文化>をもつかという点で、意義がちがってくるといわなければならない。言いかえれば、イタリア系やユダヤ系の場合と異なり、黒人の場合はそのethnic 企業が同じethnic groupのメンバーを顧客として成り立っているといっても、それは固い“ethnic solidarity”によるものというより、たんに白人たちが黒人の店を利用しないから、仕方なく黒人相手にしか商売が成り立たないという面がつよいわけである。したがって黒人の場合、民族企業の位置づけは、集団内の連帯とか特殊な文化的技術とかによってつくり出されるものではなく、もっぱら外の者たちがそのethnicityに対して抱く偏見の所産なのだというべきであろう。

4

U.Hannersは、自分のethnic groupのメンバーを、ある利益のために他の集団と結びつける橋渡しの役を果たす人の存在に注目し、それを“ethnic broker”と呼んだ。たとえば、イタリア系の場合、移民最盛期のころpadroniと呼ばれる労働者手配師がいて、WASP雇用者とわたりをつけ、自分の知己、親族関係をたよって人を狩り集めて仕事の世話をし、それによって自分も利益をえていた。これはアメリカ社会への同化が進むに従って消失した。

「民族ブローカー」は、民族諸集団の相互関係を調べるうえで重要なものである。都市におけるethnic brokerのもっとも顕著な形態は、政治行政機構の分野である。政治というものは、単一の民族集団だけをベースとするものは、なかなか成り立ちにくい。しかし移民の数がふえてくると、票田が拡大するので、うまくethnic identityを活用すれば、政権奪取の力となりうる。都市におけるethnicは、まさにそうした力となってきたといえる。私の調査したミルタウン（本誌創刊号参照）を例にとると、かつてはWASPが独占していた市の政権も、今世紀中ばごろからethnic系の手に移

った。（今日では、多くの都市で黒人市長の誕生があいついでいるのもそれと同じメカニズムによる。）だが、他方、企業（商工会議所）の方は依然としてWASP支配が続いている。そうした状況の中で、市庁と市議会の主要ポストを占拠するethnic系は、自分の集団の票田に対して国や州の援助が不十分なのを埋め合わせる形で、特別条例などをつくり、食料・衣服・燃料の特別援助をやったり、又、市役所吏員に自分と同じethnic系の人間を採用したりする。

このような形で、政治機構のボスと、選挙民との間には、もちつもたれつの関係がつくられる。しかし、それを強化するのは、やはり民族的連帯感情とそれを組織化する教会などのethnic organization である。しかし、政治機構というものは、ある一つのethnic groupだけを優遇する形では永続きしえない。他のethnic groupとの間に“共闘態勢”を確立することが、安定政権確保の不可決の道である。そういう場合、多少は自分の集団を犠牲にしてでも、他の集団との連帯のポーズを見せることが必要である。そのようなボスは、もはやかれのethnic communityのリーダーではなく、他の民族集団との仲をとりもつ“ブローカー”である。

さらにまた、そうした政治的「ブローカー」の主要な任務は、他のethnic groupとうまくやっていくことだけでなく、企業界と密接な関係を保つことである。市政はその運営の財源となってくれる企業を必要とするし、他方、企業の方も市政とうまくやっていくことが、仕事をもらううえで大切である。相互に報い合う関係がそこに成り立つ。

ところで、企業と政治とが同じ民族系の場合もあるが、多くの場合、政治はethnic系で、それを背後からコントロールしている企業はWASP系という形をとる。たとえば、ミルタウンの場合、市長の椅子は、ここ十年以上もすでにethnic系（カトリック）によって占められているが、同市の権力構造の真の核は商工会議所のメンバーで、かれらの多くは市外に住むWASPである。

表1.　ミルタウン商工会議所幹部の職業と民族的背景

会　頭	家具店主	ユダヤ系
副会頭	銀行頭取	ワスプ系
理事長	〃	〃
理　事	新聞社長	〃
〃	デパート社長	〃
〃	U．S．スチール副社長	〃
〃	自動車販売会社社長	カトリック系
〃	医　師	ワスプ系

5

以上、3と4で述べたことをまとめるとethnic minorityが、WASP支配のアメリカ社会の中で、自らのethnicityを武器にして成功をはかるには、(1)分業体制のしくみの中で、未だ他の人が手を着けていない領域を開拓する、(2)固い柵をもうけて部外者を遮断し、産業なりを発展させる自閉的な、自給自足的体制を確立する、(3)特定の領域において、労働市場あるいは票田競争のような分野で、ブローカー的役目を果たすことによって、自分のethnic groupに何らかの利益をもたらそうとする、といったやり方である。

だがしかし、どんな場合にせよ、少数民族がWASPが支配しているよりよい地位、利益を手に入れようと試みるとき、少数者としてのその地位はつねに負い目となる。この事実から逃れることはできない。本当にWASPなみの地位を得たいと思えば、この負い目となるethnicityを捨て去るしかない。しかし、かりに自分の本来のethnicityの諸属性を捨てて、WASPの主流文化に同化し、その線に沿った成功をなしとげたとしても、本来のethnicityの重荷から逃れられるかどうかは疑わしいのである。なぜならWASPから見れば、いくら成功しても「黒人は黒人、イタリアンはイタリアン」にすぎないからだ。このWASP側に、いつまでも根強く残る“ethnic”へのネガティブな感情は、少数民族の文化の特異性に加えて、かれらの多くが低所得階層であったことと結びついていると思われる。

class と ethnicity とは、しばしば重なるために両者がごっちゃになって、ethnic identity の重要な属性であるdescent その他の特長と、class の属性とが関係があるかの如くうけとられてしまう傾向があるのである。ethnic という要因がからんでいない社会移動の構造をもつ社会の場合には、人は以前属していた階級の生活様式を捨てさえすればすむけれども、この要因が働く社会の場合には、つねにそれがついて廻るわけである。

都市アメリカにおける社会移動の伝統的基盤となっているのは、主流文化たる中間階級文化を受容し、かつethnicity をできるだけ抑制することにあると言える。ところが、これは完全に ethnic 的な要素を解消していこうとすることかと言えば、そうとも言えない。とくにethnic minority の個々のメンバーは、多かれ少なかれおのれのgroupとの一体感を持ち続けざるをえず、これが不可避的に、社会階層の境界を超えて、同一ethnic group との一体感を確保する原因となっているのである。同化の限界というものがそこに厳然と横たわっている。

なぜ、同化が進んでもそうなのか。それは同化がethnic group の全メンバーが一時にそうなる形で進むならまだしも、結局その中のごく限られた部分の人だけが同化しただけで、大多数はまだもとの下層階級として残っているという場合、――それが多くのethnic minority の現実の姿である――同化した人とは、「特異」な例外であると見做されるだけである。有名人となった黒人や、白人社会に適応して地位をなした黒人が“special Negro”と白人たちから呼ばれることが、端的にそれを示している。

結局こうした状況を反映してethnic minority は、その逃れえないethnicity の重荷に対して、それを逆に積極的にうけ入れて、それを戦術化するという動きが出てきたと考えられる。ブラック・パ

ワー運動におけるethnic solidarity の強調という最近の傾向なるものは、そうした事情に由来するものと見られる。

その事情はしかし複雑である。

ethnic minority のメンバーが、立流文化への同化によって出世できたとき、まず大抵は自己のethnic group との縁を切ろうとするものである。あるいは集団のもつイメージ（黒人について白人に与えるイメージ）を修正させることによって、その帰属的地位としてのethnic identity を少しでも荷にならぬようにしようと試みる。つまり、よく思われそうなイメージを作り出そうと懸命になる。ところが一方、下層にとどまっている大多数は、そうした出世した連中の「縁切り」努力や、イメージチェンジへの努力を、自分たち仲間に対する裏切り行為だと見做しがちである。

もっともこうした同一民族集団内部の対立は、必ずしも階層内の対立だけとは限らず、実は出身地の“地方”差に含まれる対立が混入していることも多い。そしてこれは“移住期”とも関係していることが多い。ethnic系白人の間では、（ユダヤ人、イタリア人などの場合のように）出身地間対立がしばしば見られたが、黒人の場合も例外ではなかった。すでにF.Frazier が指摘しているように、黒人には比較的早く解放された黒人たちや、“house slave”として白人に可愛がられていた黒人たち〔その大部分は白人の血が入っていた〕と、長く南部農村に住み、皮膚の色の黒い、比較的“純粋”な黒人たちとの二つの流れが区別される。前者（中流黒人層に多い）と、後者（下層黒人層に多い）との間には、伝統的に対立が見られたが、とくにワシントンなどのような北部の都市に南部から貧しい黒人が大量に流入してくるに従って、対立・反目が激化したしるしがある。この相克こそは、黒人社会におけるethnic solidarity にとって最大の障壁となってきた問題である。前者は、一方では少しでもよくなるようにとかれらに援助の手を差伸べることもしたが、一般にはその地位を守るために、できるだけ後者との間に社会的距離をおこうとした。

この階層間ギャップは、今日といえどもまだ存在する。黒人の大多数がスラムに住む下層民を形成しているために、その差は依然目立つのである。中の下の階層に属する比較的安定したブルーカラー層の黒人たちは、ゲトー化（白人の郊外への逃走のために、人種別居分離のパタンが進行していくこと）のために最下層民と近接して住むことを余儀なくされることが多いが、その場合、できるだけかれらからの影響をうけぬように身を守ろうとする。だが、その生活態度は下層黒人の目から見れば、アメリカ主流文化の線に沿った生き方であり、下層黒人に対しては裏切り者と映る。そうした批判、非難の呼称として“Uncle Tom”，“handkerchief head”，“house Nigger”，“Oreo”などがある。黒人の場合には、社会移動と結びついた行動は、ethnic group からの疎外の表明だと見られやすいようである。黒人大衆にとり、status － seeking の態度は、外からもちこまれた価値観であって、人間としての価値は、status で計られるようなものではない。共に人間的価値を尊ぶ黒人ならば、黒人集団の中で平等であるべきで、その平等主義思想を内部から疑うことによって黒人大衆を裏切っている、と見るわけである。私がミルタウンで親しく交わった黒人ゲトーのある運動団体のリーダーは、ま

さにそうした考え方の人物で、“完全平等主義”こそは、黒人の民族的連帯の根本原理であると主張していた。

6

以上、現代アメリカ都市の都市的生活構造の文脈でのethnicityとclassとの関係について、概括的にいくつかの問題点を抜き出す形で、仮説的検討を加えてみた。本論は、私にとっていわば覚え書きとでもいうべきものであって、現代社会におけるethnicityの人類学的研究の可能な課題の一つを提示するだけにとどめた。本稿なりの結論を述べるべきであるが、すでに許された紙幅を超えたので、改めて別の機会に続篇として、それに言及することにしたい。（１９７６、７、１）

参　考　文　献

Barth,F. 1969 Ethnic Groups and Boundaries,
Boston : Little, Brown.

Cohen,A. 1969 Custom and Politics in Urban
Africa : A Study of Hausa Migrants in Yoruba Towns,
Berkeley : University of California Press.

Hannerz,U. 1974 “Ethnicity and Opportunity in Urban America,”
in A.Cohen,ed., Urban Ethnicity, London : Tavistock.

江淵一公 １９７３ 「ひとつの“民族集団”としての黒人の最近の動向――米国ペンシルベニア州ミルタウンの調査から――」 九州人類学会報、第１号．pp．17−26．